

メディア・テキストの経験

若年層の受容者がドラマのいじめ描写に見出す「リアル」さについての一考察

日本福祉大学ほか非常勤講師

高橋すみれ

問題意識

メディアに描かれたイメージが受容者によって「現実」的だと受け取られる、またそのような言説が産出されることを、私たちは批判的に受けとめる必要がある。メディアによって構成された世界にリアリティが見出され、それが語られることによって、テキストに投影された価値観が再生産され、強化されることになるからだ。しかしまた、メディア・テキストが受容者の日常生活の中で消費されるものであることも、忘れてはならない。メディア上のイメージにリアリティを見出すとき、同時に私たちはみずからの日常的な感覚や、価値観、ものの見方をそこに絡みつけ、自分たち自身の意味のうちにそのイメージを取り込んでいっているのだ。

本研究は、高校生間のいじめを扱った2007年6月～9月放送のテレビドラマ『ライフ』、およびその視聴者の反応をもとに、このメディア・テキストのリアリティが担う多面的な意味を考察するものである。本研究ではインタビュー調査を通して、若年層の受容者がこのドラマの描写に託していた経験や価値観を辿り、明らかにしようとする。一方でプロットが錯綜し、描写が過激化するこのドラマを「現実」的だとするような言説、またその中で捉えられる若者像の

問題点を検討しようと試みる。

2. 背景分析

同名の少女マンガを原作としたドラマ『ライフ』は、民放（フジテレビ）土曜日 23 時代の枠で放送され、原作の読者層とは異なる層にも視聴されることになる。（性的暴力も含めた）暴力描写など過激な内容を扱っているため、同ドラマは若年層に視聴されるという懸念から批判を呼んでもいた。一方で同ドラマの公式ウェブページ上では、10 代の若年層を中心とした受容者がドラマの「リアル」さについて語る投稿が多く寄せられていた。新聞記事上ではこれらの投稿が引き合いに出され、ドラマに向けられる批判と若者たちの共感とが対置され「世代」間の視点の違いとして取り上げられている。

倫理的な問題としてそのような議論がなされる際には、このドラマというメディア・テキストそのものではなく、暴力や社会病理としての「いじめ」をメディアで取り上げることの影響が中心的なテーマとされる。若者がメディアから情報を一方的に刷り込まれてコントロールされるか、メディアが社会の問題を若者に教えうるからこそ受け入れられるべきなのか、そのいずれの考えにおいても、「描かれないいじめ」が実社会、とりわけ学校社会の現状にいかに関与するか、という方向性のもとでドラマの意義が論じられがちである。そこではメディア・テキストの構成や、メディアに対する若者の反応自体は表面的に捉えられ、軽視されている。

しかし、いじめを描いたドラマに共感し、ドラマを楽しんでいた若者たちの感覚は、暴力そのものに対する感情や倫理的意識のみを基準として解釈されるべきではない。事前調査として実際にドラマ公式サイト「メッセージ」ボー

ド<<http://www.fujitv.co.jp/life/msg.html>> から 6332 件の投稿メッセージ (2009 年 1 月 28 日採取) の検討を行った。ドラマ中の描写に「リアル」という言葉によって言及しているものは全体で 478 件あり、年齢層の上ではその約 8 割が 10 代の投稿者によるものであった (9 歳以下 8 件、10 代 369 件、20 代 65 件、30 代 14 件、40 代 5 件、不記載 17 件)。ここから特に、受容者によって発される「リアル」という言葉の多義性に注目した。受容者の訴える「リアル」さは、必ずしも常に「いじめ」の描写に向けて言われているわけではなく、また常に「現実の」いじめを参照して言われているわけでもない。この「リアル」という言葉は、描かれたものが視聴者の (視聴経験それ自体を含む) 経験や生活感覚の中で何らかのリアリティを帯びるときに、意味をなしている。そうであれば、この言葉が発される文脈を分析することで、受容者自身にとってのこのメディア・テキストの意味——とりわけ、彼らがそれをいかに自身の生活感覚や社会観のなかに位置づけているのか——を辿ることも可能ではないかと考えた。また、その中でもいじめ描写に向ける彼ら自身の解釈を明らかにすることができれば、ドラマに対する若者たちの共感を一面的に捉えるような言説の偏向を指摘することもできる。

3. 調査方法

2010 年 4 月以降、「視聴当時 10 代で、興味をもって継続的にドラマを視ていた」対象者を募集し、聞き取り調査をすすめている。事前アンケート (視聴のきっかけ/視聴環境/ドラマの印象/ドラマの描写を「リアル」と感じるものがあつたか/ウェブページへアクセスした・原作を読んだことがあるか、について) を土台にした非構造化インタビュー。

4. 中間報告

試行の段階ではあるが、一人目に対面でインタビューを行った B さん（視聴当時 16 歳、女性、大学生）のサンプルをもとに、今後の質的分析・考察の可能性について報告を行った。

B さんはドラマおよび原作のストーリーの突飛さを認めながらも、各々のテキストに感じるような「リアル」さとは「自分の感覚で、体感したり感じてきたこと」にリンクするものだと語っている。また、「リアル」さが感じられる部分として言及されたのは「女子間の（関係の）ややこしさ」といった、人間関係が展開する際の葛藤の描写などを主としていた。

また、原作を読んでいた B さんは「マンガの方がリアル」だという興味深い発言をしている。エピソードが続き、キャラクターの家庭生活やキャラクター間の人間関係が充実して描かれていた原作マンガへの思い入れや共感があったため、ドラマ版ではいじめの展開が中心に扱われ、作品世界が縮約されているという印象を受けたという。彼女にとってドラマのリアリティは、マンガという他のメディア・テキストの受容経験との対比によって部分的に判断されている。

一方、「リアル」という言葉についての聞き取りで言及されなかった暴力描写については、行為自体は「どこかで起こっているであろう」というレベルで現実性を認められるが、自分の感覚として肉化されるかということが「結果的に」と答え、それらのイメージが「害をもたらす」か否かについても同様に人の受けとめ方による「結果」としての問題だと考えている。

B さんとのインタビューからは、人間関係やその中で生じる気持ちなど、受容

者自身が経験してきたことが、「リアル」さというメディア・テキスト観に影響していたことが認められる。しかし「リアル」か否かという共感の度合いがテキストの世界観やその現実性に対する安易な受け入れを意味しているわけではない。この判断についての語りを契機とし、表現形式の違いからくる印象などテキストの構成され方やテキストの多角的な受けとめられ方について、受容者が意識を向けていることが伺われた。

5. 今後の課題

本研究ではドラマに対して受容者が感じる「リアル」さというものの多義性を議論の出発点としているが、今後調査を続けサンプルの分析を重ねていく中で、この言葉が包含する意味や指示対象を分類するための基準をより明確にしていく必要がある。

また、若者がそのドラマを「リアル」だと言うこと自体のオーセンティシティ（真正さ）を、より広い文脈で再考する余地がある。2の背景分析で触れたように、番組に対する批判と若者たちの支持が対立的に扱われ、ウェブ上で積極的に「リアル」さを語る若者たちのコメントがその引き合いに出されることがある。しかしこのような扱い方を、若者自身がメディアを使い、ドラマについての意見を投げかけていたという行為をもって安易に評価し、受け入れるべきではない。先の言説においては「描かれないじめ」が焦点化され、その影響の問題として人々の反応を対立させて扱う傾向にあった。そのような方向性のもと、物語や描写のされ方などテキスト自体の偏向は軽視されたまま、ドラマの意義が語られ正当化されていたと言える¹。このような視点から見れば、「ウェブ

¹ 報告の際には特にこのような正当化がテレビ上で若手人気女優の性的イメージや女性に対する性的な暴力描写を見せる口実としても機能しているという指摘も頂いた。

上での若者のメッセージ」自体もまたテキストとして、商業的なメッセージに組み込まれていると言えるのだ。若者たちのテキスト解釈にみるメディア・リテラシーを検討する上でも、このようにドラマに触れ、ネット上で語る若者たちの表象を批判的に分析することは重要であると考えられる。